

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

個人研究

2017年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職	氏名
	現代心理学部・教授	中村 秀之 印
研究課題	ニューディール後期のハリウッド映画における階級表象とパストラル・モード	
研究期間	2017年度	
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 469,000円 / (採択金額) 469,000円	

研究の概要(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

本研究の目的は、ニューディール後期のハリウッド映画の階級表象を、モードとしての牧歌(pastoral)という仮説的概念に準拠した作品分析によって解明することにあつた。この時期のハリウッド映画は、大衆娯楽の商品として、階級関係を題材とする際にその深刻さを隠すような加工を施す傾向があつたのだが、そのような表象の独自性を捉えるために、本研究は文学研究者のウィリアム・エンプソンが批評実践で用いた「牧歌(pastoral)」の概念を、葛藤をはらんだ不安定な社会空間を開示する表象のモードとして整理し、それにもとづいて、この時期の範例的作品である『市民ケーン』(1941、RKO、オーソン・ウェルズ監督・主演)などの分析に適用して、その仮説の有効性を示した。

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ハリウッド映画] [階級表象] [牧歌]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**1. 計画と実行**

本研究は、ハリウッド映画の表象モードとしての牧歌の理論的検討とその範例的作品である『市民ケーン』の分析を相互にフィードバックさせながら進めるという計画を立て、ほぼその通りに遂行された。研究の成果は、北海道大学映像・現代文化論学会創立大会での招待講演「パストラルとメロドラマ——ハリウッド映画の表象モードを再考する」と『立教映像身体学研究』6号への投稿論文『『市民ケーン』のガラス球——パストラル・モードによる階級表象』にまとめられ、公表された。その概要を以下に再構成して述べる。

2. 階級表象の研究におけるエンプソン「牧歌」論の可能性

現代の人文学において階級の問題は性や人種・民族と比べて周縁に置かれてきたが、その理由は現代のグローバルな政治状況だけでなく学術研究における2つの階級的ジレンマにも起因する。まず、性や人種・民族と異なり階級的マイノリティの研究者のアイデンティティに関するジレンマがある。つまり、下層階級出身の者が研究者になったとしても、その社会的上昇によって階級的アイデンティティが変化や喪失を被る。次に、上位の階級を出自とする研究者がより下位の階級の問題を扱う場合、対象との関係が *condescending* なものになりがちである。私がエンプソンの「牧歌」論を検討してそこに見出した可能性は、その議論が、このようなジレンマが生じる階級関係のアイロニーそれ自体を対象化しようという特質である。自身は紳士階級出身であるエンプソンは牧歌の政治的言説としての機能に注目した。すなわち、伝統的牧歌の「肝要な仕組み (the essential trick)」は、「単純な人々」(田舎者や貧者)に「教養ある上流の言葉」を使わせて「強い感情」を表現させることで富者と貧者の間の美しい関係を歌い上げる点にある (William Empson, *Some Versions of Pastoral*, New York: New Directions, 1974: 11=1982, 『牧歌の諸変奏』柴田稔彦訳、研究社出版、1982: 11)。換言すれば、(上流の知識人の作者が下層の牧人の主人公に高尚な主題を洗練された様式で語らせることで階級調和を演出する)のである。ただし、エンプソンがその著作で実質的に明らかにしようとしたのは、上述の伝統的牧歌の歴史的展開、その「諸変奏」である。通常は牧歌とはみなされない作品も含めて、それらの階級的諸相が多角的に論じられている。

3. エンプソン「牧歌」論の背景と成立事情

エンプソンの『牧歌の諸変奏』は1930年代に書き継がれた論文を集めた本である。世界的な全体主義の台頭を背景として、階級の問題が顕在化した時代である。特に文化の領域ではプロレタリア文学やミドルブラウの問題が盛んに論じられた。エンプソンの「牧歌」論は明らかにこのような状況を背景としている。興味深いのは、その論文のほとんどが、エンプソンが英文学の教師として日本に招聘されていた時期に執筆されたことだ。エンプソンの伝記を著したジョン・ハッフェンデンの調査によれば、エンプソンは日本の学生たち(東京文理科大学と東京帝国大学)が、治安維持法下の思想統制を恐れて文学作品の政治的主題を論じることを避ける傾向があるのに驚き、作品読解の指導を通して学生たちを鼓舞することもあったという (John Haffenden, *William Empson: Among the Mandarins*. New York: Oxford UP, 2005, 294-297.)。

4. エンプソン「牧歌」論の要点

エンプソン自身は「牧歌」のアイデアを理論化することではなく、もっぱら批評的実践で示すにとどまった。私はエンプソンの著作を精査して、そこから次の4つの論点を抽出できると考えた。(1)伝統的牧歌は階級調和を偽装的に演出する。(2)ある種の作品には英雄物語と牧人物語の階級的差異が複雑に絡み合う「ダブル・プロット」が存在する。(3)牧歌における自然(田園)は社会的関係の差異を超越して階級問題を解消する機能を持つ。(4)子どもは階級関係の批判者ないし壊乱者の役割を果たすことがある。——このような概念化によって、「牧歌」を階級関係のアイロニカルで不安定な特質を開示する表象モードとして理解し、文学以外の領域、特にハリウッド映画の研究に応用することができる見通しを得た。従来の映画学においてハリウッド映画の有力な表象モードとして論じられてきたのはメロドラマであるが、このモードは社会的葛藤を劇的に誇張する点に特徴がある。ところが、1930年代から40年代初頭にかけて、大恐慌後の深刻な危機で階級間の対立や矛盾が露呈したさなか、ハリウッド映画は、大衆娯楽商品としての映画作品が広く階級の違いを越えて受容されることを企図し、作品中の階級表象を曖昧な形に加工して無害化しようとした。階級関係は、葛藤を強調するメロドラマとは異なる方式で表象化されたのである。この点は映画学において散発的にしか指摘されてこなかったのだが、その方式つまりモードはある程度首尾一貫したものだったのではないかという私の仮説が、エンプソン「牧歌」論の上述のような概念的整理にもとづいて検証可能になった。

研究成果の概要 (つづき)

5. 『市民ケーン』の分析

『市民ケーン』は、いくつかの理由からパストラル・モード仮説にとって範例的な作品である。製作の中心人物であったオーソン・ウェルズは、1930年代後半、ニューディール政策を積極的に支持し、人民戦線の一翼を担って文化活動を大胆に展開した人物である。そのウェルズが当時の大富豪で保守的なメディア経営者ウィリアム・ランドルフ・ハーストを批判するために映画のモデルとしたという解釈は当時から盛んに取り沙汰され、その後の研究でも繰り返し論じられてきた。しかし、この映画が、主人公チャールズ・フォスター・ケーンの極端な階級上昇や異なる階級間の結婚を物語の中心に置き、階級関係における葛藤を描いていることは明白である。にもかかわらず、この映画に関する議論は、主人公ケーンの間人像にのみ焦点を合わせ、そのエディプス・コンプレックスや過去への郷愁という心理面ばかりを論じてきた。私が論文で明らかにしたのは、まさにそのような受容が、この映画のパストラル・モードによって誘導された結果だということである。本論文ではまず、ケーンという人物の独自性が、成功者や資本家という通念とは異なり、階級関係を壊乱する子どもであることを指摘した。次に、映画テキストの詳細な分析によって、この子ども性、映画の重要な小道具であるガラス球の牧歌的イメージ、そして主人公が捕われる「階級交差空想」という3つの要素の間の関係が、エンプソンの「牧歌」論の観点から統一的に解釈できることを示した。こうして、ガラス球がケーンの心理の象徴ではなく階級関係に規定された存在のアレゴリーであることを解明することで、映画史上に名高いこの作品の政治的解釈を根本的に刷新した。この映画に関する分厚い先行研究との対話を含めて論証は複雑なものにならざるを得なかったので、詳細は論文をお読みいただきたい。

6. ニューディール後期の他の作品の検討

範例的作品として論文で取り上げた『市民ケーン』は、ニューディール後期というよりも厳密にはポスト・ニューディール期の作品であり、私の考えではパストラル・モードが極限まで洗練された映画である。それ以前の、正確にニューディール後期に属する作品のいくつかには、パストラル・モードがよりわかりやすい形で用いられている。例えばギャング映画の『札つき女』(1937)は、チャールズ・エッカートの貴重な先行研究が明らかにしたように階級表象の「変形」が見られるのだが、これもエッカートが指摘しているとおり、都会と田舎の対立が作品の主要な構造的契機となっている (Charles Eckert, "The Anatomy of a Proletarian Film: Warner's *Marked Woman*," *Film Quarterly*, 27(2), 1973-1974, pp. 10-24.)。都会と田舎の対立という主題は、まさにパストラル・モードの観点からより明確にその作品における機能を明らかにすることができる筈である。また、今回の助成を利用して東京国立近代美術館フィルムセンター(2018年4月より国立映画アーカイブ)の特別映写観覧制度で観ることができた『拾万弗玉手箱』(1936)は、呑気な貧しい田舎者の主人公がギャングの隠した大金を拾ったことで引き起こされる騒動を描いた喜劇だが、この主人公のイメージや事件の顛末は、まさに伝統的牧歌における階級調和の偽装に適合する。その他、この時期の主要な映画監督であるフランク・キャプラの『或る夜の出来事』(1934)、『オペラ・ハット』(1936)、『スミス都へ行く』(1939)や、ジョン・フォードの『駅馬車』(1939)、『怒りの葡萄』(1940)、『タバコ・ロード』(1941)、『わが谷は緑なりき』(1941)なども、それぞれ異なる「牧歌」的特質を持っている。それは階級調和の神話、階級秩序の批判者としての子ども、社会に対する自然の超越的關係などである。このよう諸特徴から、この時期のハリウッド映画の歴史をパストラル・モードの観点から書き換えることは十分に可能であり、アメリカ映画史の認識を刷新することになるだろう。

7. 現代に至る階級表象研究への寄与

今回の研究によって、ニューディール後期あるいはそれ以前のハリウッド映画にパストラル・モード仮説を適用することの有効性を示すことができた。やや先走った話しではあるけれども、その後、現代に至るアメリカ映画に関しても、パストラル・モードによる階級表象が現れていることを予想してもよいだろう。例えば『グッド・ウィル・ハンティング 旅立ち』(1997)は、マット・デイモン演じる天才的頭脳を持つ主人公がDVに起因するPTSDを克服する物語だが、同時に階級上昇の可能性を主題とする作品でもある。映画の中で労働者階級の主人公とその親友との美しい友情が描かれるが、それはたぶんに伝統的牧歌の流儀によっている。こうして、必然的に社会的要素を物語の題材や主題として取り込まざるを得ない劇映画に対して、これまで抑圧され隠蔽されてきた階級関係の観点を導入することで、その作品の認識を大きく転換させ、さらに社会や政治に対する想像力のあり方を変革することも期待できる。

※ この(様式2)に記入の、成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 中村秀之 「『市民ケーン』のガラス球——パストラル・モードによる階級表象」、『立教映像身体学研究』6号、2018年3月、45-64頁。(単独、「教員研究論文」[査読なし])

②なし

③なし

④ 中村秀之 「パストラルとメロドラマ——ハリウッド映画の表象モードを再考する」、北海道大学映像・現代文化論学会創立大会講演、2017年11月11日(土)、北海道大学。(単独、招待あり)